

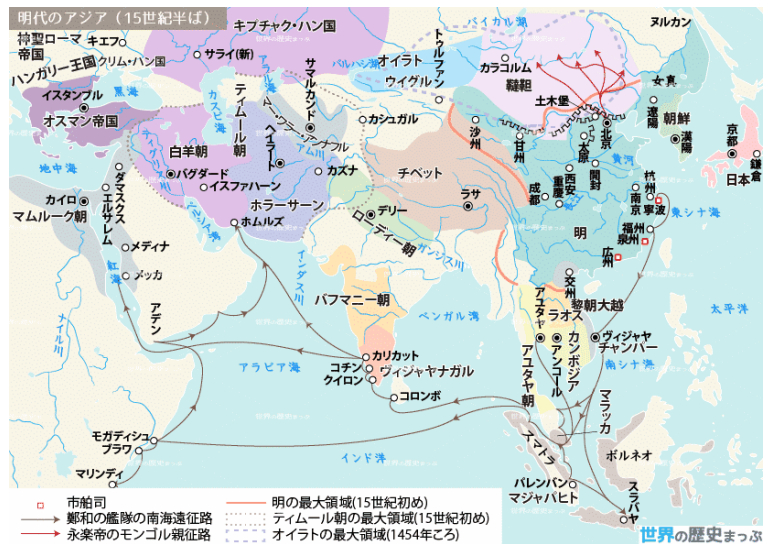
土木の変とは？

明の英宗（＝ ）が1449年（ ）で指導者が（ ）の（ ）に捕らえられた事件。

正統帝はのち送還され、復位し、（ ）となる。

【土木の変の背景には】

明の（ ）は積極的な対外政策のもと、（ ）を増やしていった。  
 明は（ ）も朝貢関係を結んでいた。



オイラトは明と（ ）とを結ぶ貿易の利益を得るため、  
 明の物産を大量に入手するために明への（ ）の取引の拡大を要求していた。

朝貢関係は、周辺国の（ ）に対して、  
 明はより多額の中国産品を回贈として与えていたため、  
 朝貢貿易は、周辺国にとって大きな（ ）をもたらしていた。  
 cf) （ ）とは、周辺諸国の支配者との間での形式上の（ ）。

永楽帝の死後も、オイラトは朝貢回数の増加や貿易額の拡大を求めて明に侵入を繰り返していた。

これに対して1449年オイラト軍を討つため、自ら軍を率いて出陣したのが明の英宗（ ）。

しかし、正統帝は北京北部の（ ）で（ ）が指導者のオイラト軍に敗れ、捕虜となった。これを（ ）という。

土木の変以後、明の対外政策は北方に対して（ ）に。守備重視として、（ ）を補修。東は渤海に臨む（ ）から西は河西回廊の（ ）まで、5000km 近くにおよぶ長城が完成。

